

Fukushima Hamadori Cinema Project 2025



福島県通り シネマプロジェクト

スタッフ紹介

2チーム体制で制作。若手映画監督ほか、撮影・録音・編集を指導する制作スタッフや車両担当をそれぞれ配置、本部スタッフも手厚くフォローする。



宮瀬佐知子

神奈川県出身。助監督、AP、キャスティングなどを経験した後、プロデューサーとして独立。短編監督作「ミルクレディ」が第21回大阪アジアン映画祭スペシャル・メンション受賞。プロデューサー作品は「君が世界のはじまり」「宝島」など。



林真子

1996年生まれ、兵庫県出身。大学卒業後は主に美術部として作品に参加。大学時代の仲間と映像制作団体「世田谷センスマンズ」を結成。初長編監督作「これらが全てFantasyだったあの頃。」がびあフルムフェスティバル2024で審査員特別賞受賞。



迫あすみ

神奈川県出身。大学卒業後カナダで映像を学ぶ。卒業後帰国、撮影助手として主にドラマの撮影に携わる。2014年から2年間はオーストラリアを拠点に活動。2021年撮影監督として独立。



渡邊りか子

1994年生まれ、福岡県出身。日本大学芸術学部映画学科卒業後、主に俳優として活動。2024年、初監督作「すとん」が第19回大阪アジアン映画祭インディ・フォーラム部門で入選し、翌年に2作目「心玉」との2本立て劇場公開を果たした。



二宮絵梨香

1998年生まれ、福岡県出身。主に俳優として活動し、2025年には主演作「はなびのひ」、ほか「早乙女カナコの場合は」「悪い夏」が公開。現在、初の長編映画監督作を準備中。



北林佑基

1996年生まれ。神戸芸術工科大学に進学し、石井岳龍監督に師事。映像制作団体「世田谷センスマンズ」を結成し映画制作に携わる。経済産業省の次世代クリエイター支援事業「創風」に採択され短編「パッキン太郎」を制作中。



大宮実

北海道出身。照明助手として「左様なら」(19)、制作進行として「メンドウな人々」(23)「蘭島行」(25)が劇場公開されたほか、札幌座が手掛ける舞台の制作に携わる。出演作「PEAK END」(25)が上映。



村山暁

2002年生まれ。京都芸術大学卒業制作「お笑えない芸人」(25)では出演・助監督を務めSKIPシティ国際Oシネマ映画祭スペシャル・メンション受賞。出演作「ハローマイフレンド」が公開待機中。



日高真優

本プロジェクトには3年連続で参加。前回は参加者側の学生リーダーを務め、今回は本部制作スタッフの学生リーダーを務める。現在、大学3年生で映画制作を勉強中。俳優としても活動する。



柳明日菜

熊本県出身。2023年、長編映画『テクノプラザーズ』で主演デビュー。初監督・脚本・主演作『レイニーブルー』が25年に公開。ゆうばり国際ファンタスティック映画祭ニューウエーブアワード賞を受賞。



5日間のスケジュール



	12.16 団	12.17 团	12.18 团	12.19 金	12.20 土
7:00					
8:00					
9:00					
10:00	各自、現地へ移動 13:15 集合	伝承館見学 双葉を知る町ガイド	撮影準備	撮影 & 編集	発表準備 上映発表会
11:00					
12:00		昼食	昼食	昼食	昼食 & 地域交流会
13:00					
14:00	オリエンテーション	脚本づくり	撮影		
15:00	企画会議・シナハン等 オリエンテーション	双葉町の子どもたち 撮影に参加			
16:00					
17:00	夕食	夕食	夕食	夕食	各自、帰宅
18:00	企画会議・シナハン等 オリエンテーション	自由時間 (各チーム毎)	自由時間 (各チーム毎)	自由時間 (各チーム毎)	
19:00					
20:00					

オリエンテーション

映画づくりに参加するスタッフとクルーがそれぞれ自己紹介。2時間にわたるオリエンテーションを通して、プロジェクトの概要と映画制作の流れを掴む。



12月16日、午後一時過ぎ。JR双葉駅に集合した参加者一行は、ひと足先に現地入りした本部スタッフに出迎えられ、オリエンテーションの会場となる浅野撫糸の施設「双葉スーパーゼロミル」へ。糸やタオル製品を双葉町から国内外に発信しているこうと2023年にオープンした同施設は、復興産業拠点として雇用や人の流れを創出、新たな観光スポットとしても注目される。

浅野撫糸のご厚意により広めの会議室が用意され、スタッフと参加者が初顔合わせ。北は北海道から南は九州と、日本全国から集まつたメンバーはほぼ初対面、しかも初めて双葉町を訪れる人がほとんどだった。双葉町を訪れる人がほとんどだった。そこで、三谷一夫統括が本プロジェクトの趣旨を説明すると同時に、2011年に起きた東日本大震災・原子弹災害の影響で当時7000人だった住民が全員避難、人口ゼロだったプロジェクト立ち上げ当初の双葉町の様子について語った。双葉町の人々が恐れるのは震災の記憶が薄れること。幼い子どもたち

は当然、生まれる前の震災のことは知らない。今後、そんな若い人たちが増えていくことからも、本プロジェクトに参加し、福島浜通り・双葉町を訪れるることによってその存在を知りたいというのが、数少ない町民の願いでもある。

初日はまずはコミュニケーションをとることからと、スタッフの挨拶の後、班分けされたAチーム、Bチームごとに自己紹介。これまでの参加者はとは異なり、その多くは少なからず映画の現場を経験しているという。ただ、制作側にまわったことがなく、概ねゼロからのスタート。ロケハン、脚本づくり、撮影、編集、上映会と、映画づくりの全工程を5日間で行うことは無謀なようにも思える。しかしも今は安全管理体制を強化しようと、一日の作業時間を抑えるなど自主規制を進める意識改革を実施、無理のないスケジュールに挑戦する。

前日に開催(P13参照)するなど、新しい試みが行われた。



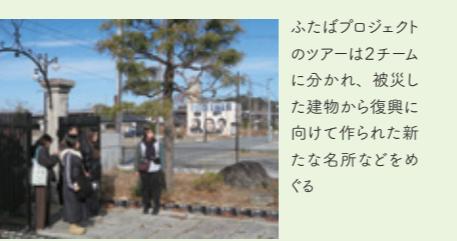
オリエンテーションの進行を務めるのは4回目の参加となる向田優氏。プロジェクトアドバイザーとして、全体の概要を説明していく。少々緊張しながら説明を受けるスタッフ&クルーの皆さん

双葉を知る 町ガイド

映画づくりを学ぶとともに、まずは双葉町のことを知ってほしいと2日目の午前中にはこの町の歴史を知る「東日本大震災・原子弹災害伝承館」見学と、魅力あるまちづくりのための一助になると、真剣に説明を受ける参加者たちの姿が印象的だった。実際に上映会では「美しい風景が撮れた」「また双葉町に戻ってきたい」と感謝する。



震災の教訓を次世代に継承する、県内随一のアーカイブ拠点施設「東日本大震災・原子弹災害伝承館」を見学。改めて双葉町の歴史を知る



ふたばプロジェクトのツアーは2チームに分かれ、被災した建物から復興に向けて作られた新たな名所などをめぐる



旧駅舎憩いのスペース

双葉駅旧駅舎は来訪者の憩いと交流の場として活用。双葉町を紹介するパネルなども展示する。



壁画アート

各地で壁画アート制作事業を実施するOVER ALLsが駅周辺の空き店舗などに壁画を描き話題に。



相馬妙見宮初發神社

大震災の影響で傾いた神殿などが修復された。由緒ある神社は今も昔も町民の心の拠り所。



旧三宮堂田中医院診療所

大正時代位に建造された木造洋館風医院建築。2022年に国登録有形文化財に登録された。



双葉町産業交流センター

復興の中核を担う交流センター内には土産物店やフードコート、コンビニが入っている。



東日本大震災・原子弹災害伝承館

東日本大震災と原子弹災害の貴重な資料が展示。災害を経験した語り部による講和も実施される。

編集

映画の出来を左右する編集作業。撮りだめた素材をどう生かし、つないでいくか。専門の機器を使いながら、完成に向けての作業を進める。

クラシックアップしてホツとする間もなく編集作業へ。これまでのプロジェクトでは時間が許す限り作業を粘っていたが、今は終了の時間を決めて取り組むことに。時間は無駄にしたくないと、集中して臨む姿勢が頼もしい。また、両チームにプロの編集者がついているのも心強い。

編集は撮影した素材をどう切ってつなげていくかも重要だが、効果音やBGMの挿入、色味の調整、特殊効果、タイトルをどうみせるか、エンドクレジットの入れ方、選曲など細かな作業が必要になってくる。

Aチームはまず台本の流れをホワイトボードに書き出し、映像をチェック。挿入したい風景を追加で撮りに行く実景班と編集班に分かれそれぞれ動き出した。編集班は技術スタッフのプリンセス・アンポール氏の説明を受けながらデジタル編集ソフトを使って進めていく。

一方、Bチームは大きなモニタに編集ソフトの画面を映し、松本佳樹氏がみんなの意見を聞きながら手際よく編集を進めていく。また、その

場でアフレコや効果音を収録できるようマイクを用意し、親戚が集まつたときの様子（カヤ）を再現。BG Mにもこだわり、翌朝、村川晴南さんが作曲した曲を収録した。

A team

ふいたばのよっぱ

(11分)



出演

水野彩美、一宮レイゼル、小熊美由紀、鈴木智恵、四宮義斗、伊藤脩平、（双葉町の子どもたち）綾部蒔千、綾部灯来、岩本真歩、岩本真芽、高久田寧々

STORY

思い思いの宝物をタイムカプセル缶に入れた4人の子どもたち。15年後、成長した彼らのもとに「2025年12月20日午前10時双葉町こども園に集合」といった招待カードが見つかる。久しぶりに再会し話が弾む、肝心のタイムカプセルを保管した場所は見つからない。そんな状況にイライラし始めた4人。そのうち陰悪な雰囲気になり、ついには言い合いに……。

出演

村川晴南、佳香、九條えり花、中亮介、中澤莉胡、白川紗江、（協力してくれた地域の方）齊藤泰道、綾部蒔千、綾部灯来、高久田寧々

STORY

ハイエースで旅するハル、エリカ、カコの女性3人組。双葉町にたどり着くも、道が分からずガソリンもなくなりイライラし始めたエリカを、二人はまるで気にする様子がない。さすがにお腹もすいたからと、3人は車から降りてぶらぶらとまち歩き。だがハルは一人、手持ちのカメラで景色をひたすら収めるだけで一向に口を開かず、画像を見せることもない……。

市民参加によるワークショップ開催



カメラ慣れしているお子さんも多く、何事もおじせず積極的に参加。明るいパフォーマンスを披露する

向田優氏を講師に迎え、学生リーダーの水野彩美さん、中澤莉胡さん、日高真優さんがサポート、昨年もエキストラとして出演してくれた綾部蒔千ちゃん、灯来ちゃん、高久田寧々ちゃんを含む6人の子どもたちが参加した。

最年長は小学校6年生。いずれも震災を知らない子どもたちばかり。そんな子どもたちが元気に歌つて踊る姿を見ているだけで地元の大人たちは胸に迫るものがあるという。彼らの出演シーンが期待される。

震災を知らない子どもたちばかり。そんな子どもたちが元気に歌つて踊る姿を見ているだけで地元の大人たちは胸に迫るものがあるという。彼らの出演シーンが期待される。





うぐる

(12分)



出演

水野彩美、一宮レイゼル、小熊美由紀、鈴木智恵、四宮義斗、伊藤脩平、（双葉町の子どもたち）綾部蒔千、綾部灯来、岩本真歩、岩本真芽、高久田寧々

STORY

ハイエースで旅するハル、エリカ、カコの女性3人組。双葉町にたどり着くも、道が分からずガソリンもなくなりイライラし始めたエリカを、二人はまるで気にする様子がない。さすがにお腹もすいたからと、3人は車から降りてぶらぶらとまち歩き。だがハルは一人、手持ちのカメラで景色をひたすら収めるだけで一向に口を開かず、画像を見せることもない……。

上映発表会

最終日となる5日目。完成した作品を関係者ほか一般のお客様に披露する、本プロジェクト最大のイベントを産業交流センターで開催。



「現場経験のある方が多い中、ほぼ未経験の自分は足を引っ張るようになっていたら、主演をやることに。遠慮していた気持ちや自信のなさに関係なく随所で決断を迫られ、未熟でも完成させなければならない状況に覚悟を決めました。ここでしかできなかった経験を糧に、さまざまな表現に関わっていけたらいいなと思います」

Bチーム・村川晴南

「今回の作品のテーマは“プレゼント”。まさにこの5日間は自分にとってプレゼントのような時間でした」

Aチーム・伊藤脩平

「こだわりが強いメンバーが集まりながらも、ほかの人の意見を取り入れ、より良い意見を出す良い循環が生まれ、凄くいい雰囲気で作品をつくることができました。改めて見た完成作品は引きの画が多くあったこともあり、双葉町の景色はとても綺麗だと再確認。この景色があつてこそ主演の3人が生き生きとし、映画に素敵なエッセンスを与えてくれたと思います」

Bチーム・九條えり花

「地元の方に素敵なまちめぐりツアーを催行していただき、またここに戻ってきてみたいと思える作品ができました」

Aチームリーダー・宮瀬佐知子

「同期からもらった恩送りを元に、この作品を作りました。このステージを作ってくれた恩送りもあり、僕たちもこの作品を介して恩送りができるのかなと思って嬉しく感動しました」

Bチーム・中亮介

「出演していないのに、お客様に見ていただくことがこんなにもドキドキするなんて。プロの皆様に支えられ、いろいろ教えていただき、映画づくりは決して一人ではできないと実感。次の現場でお会いできるよう精進します」

Aチーム・中園菜々子

「みんなで意見を出し合って決めたタイトル『めぐる』をとても気に入っています。主人公ハルの名前から季節が巡り、人との出会いが巡り、感情表現の一つとしてのカメラが大人から子どもと世代を巡っていく。車で双葉を巡って映像に焼き付けていく——いろいろな意味を重ねました。いただいた恩をすべてお返しするのは難しいけれど、今回の経験から監督をやりたい意思も芽生え、表現を通してこれから恩を送っていけたらと思います」

Bチーム・九條えり花

「地元の方にも深く関わっていただき、ここからこのプロジェクトは本格的に動き出すんだと改めて思いました。これからも続くプロジェクトにしたいと考えたく、今回はスタッフとして参加。目標は、今回参加してくれた子どもたちが学生になった時にこのプロジェクトに参加してくれること。実現したら泣きます。そんな形で、このプロジェクトが双葉町に根付いたらいいなと思います」

Bチーム学生リーダー・中澤莉胡

「プロジェクトに参加するのは2回目ですが、メンバーが違うだけで作り方も雰囲気も全然違う。新しい発見もあり、凄く充実した5日間になりました」

Aチーム・鈴木智恵



過ぎてしまえばあつという間の5日間。緊張がつづいた映画づくり体験だったが、それを締めくる上映&発表会を11時より開催、その準備が早朝より進められた。会場入り口には手作りの手描き案内板を掲示。これまでのプロジェクトをまとめたパンフレットをはじめ、オリジナルのトレーナー＆メモ帳などのノベルティが来場者向けに用意された。

一方、各チームは完成作品の上映テストを実施。音声、明るさなどの調整を行うのだが、今回はなかなかスクリーンに映像が映し出されず、関係者の肝を冷やした。なんとかぎりぎり間に合い、来場者を迎える準備が万全に整った。今年は晴天にも恵まれ、双葉町の人々や撮影に協力した関係者で会場は満席となつた。

上映後、リーダーと参加者たちが壇上に上がり、作品への思いと5日間の映画づくり体験の感想をそれぞれ語った。なかには胸がいっぱいになり、涙で言葉を詰まらせる参加者も。完成度も高く、やりきった充実感溢れるエネルギーに満ちていた。



上映会場入口には本部スタッフによる手書き案内図を用意し、Aチーム、Bチームのクルーたちが出迎える。一般客のみなさんには記帳をお願いし、パンフレットやノベルティをプレゼント

さらに今回は撮影に協力いただいた子どもたちをはじめ、双葉町住民の方々にも感想を伺うことに。「双葉町にとっても参加者のみなさんにとっても特別な体験」、「素敵な作品に感動した」との温かい声に励ますたえを感じる上映発表会となつた。

さらに今回撮影に協力いただいた子どもたちをはじめ、双葉町住民の方々にも感想を伺うことに。「双葉町にとっても参加者のみなさんに感動した」との温かい声に励ますたえを感じる上映発表会となつた。



「拝見した映画は素晴らしい、双葉の現状を撮っていただき、ありがとうございます。双葉の魅力を多くの人に伝えなければ幸いです」と双葉駅西管理組合・国分信一さん



お客様からは「子どもたちの出演が嬉しそう」「滅多に体験できない機会をありがとうございます」「みなさんがまた戻ってきてみたいと思える町にしたい」との感想をいただいた



「一つの目標に向かいみんなが共有する空間の良さ。短い時間だったからよし実感できた」と学生リーダーの水野彩美さん。出演した子どもたちも登壇し「今年も参加。両チームに出演して楽しかった」「緊張したけど、みんなが協力していい作品ができる嬉しかった」とコメント





**HAMACUL
ART 2025
PROJECT**

ハマカルアートプロジェクト



経済産業省

ハマカルアートプロジェクト 2025

キネマ旬報企画 映画24区

地域プロデュース事務局

TEL : 03-6264-3880

公式HP : fukushima-cinemaproject.jp